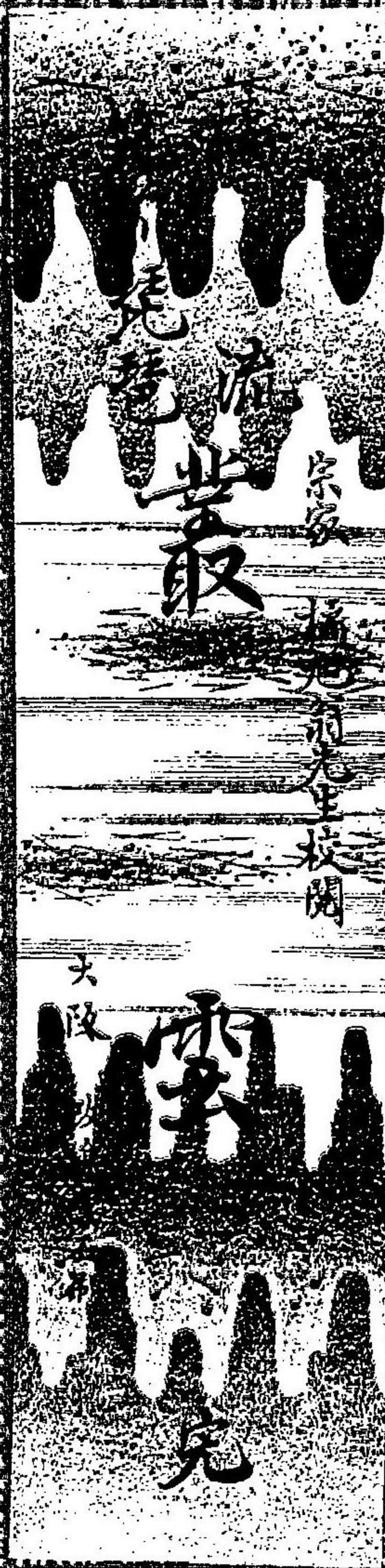
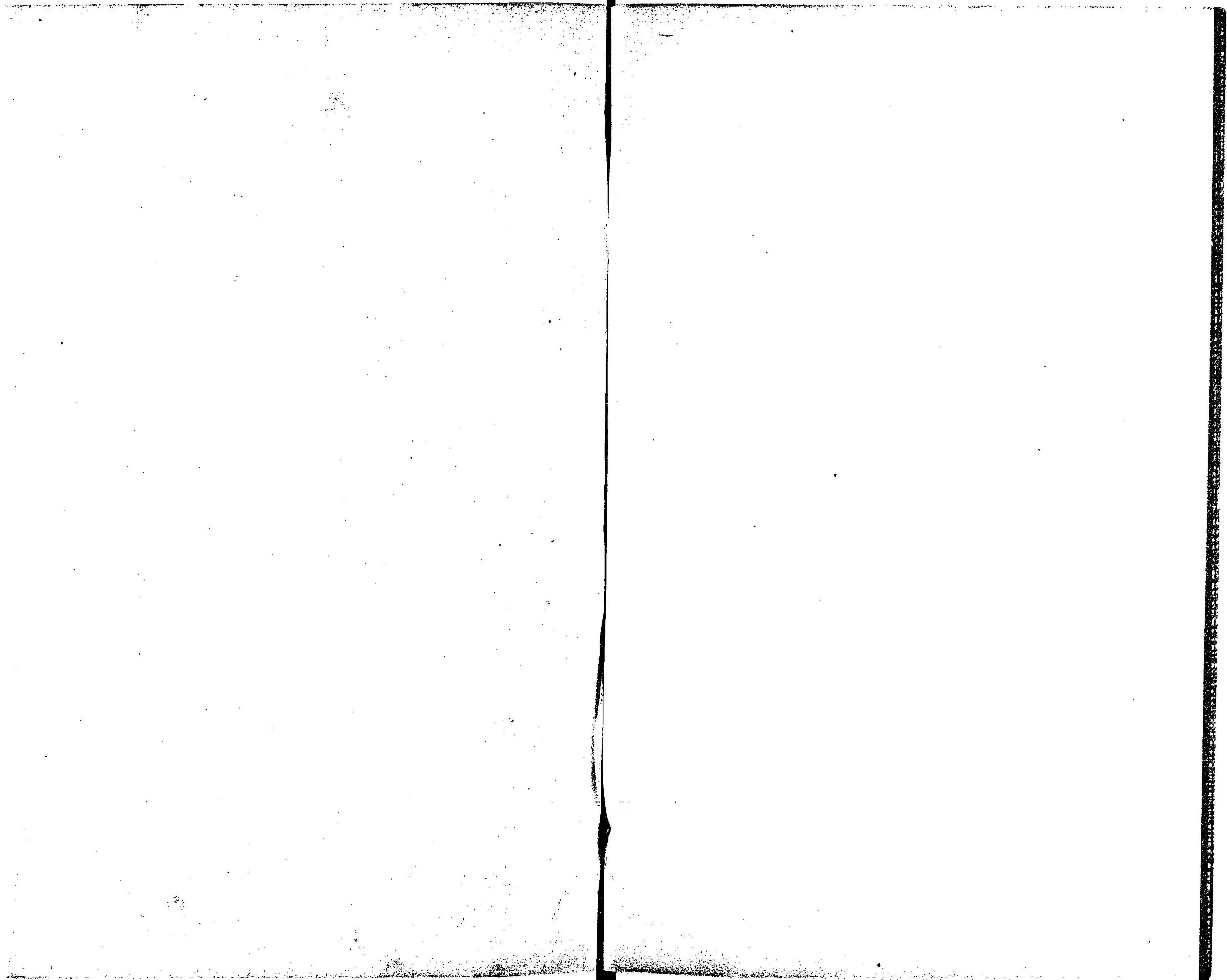


特44

86



265  
109



音息緒  
法中專

博

明治  
43. 6. 27  
内交

己酉初夏

柳江題



叢雲

玉蘭作

千早ふる神代のむか

くも立つ出雲の國に

手摩乳と云ふ長者有けるが

其ひとり子の稲田姫を

所の作法是非なくも

簸の河上にかくれ住む

八岐の大蛇の生贄に

供る事とはなりにけり

すずくに時刻は夜半の雲

天を焦せるかじり火や

簸の川たぎる音たかく

そびゆる嶺に谷ふか

ハツの甕に毒酒を盛り

影を浮べたるたかたな

五重の荒蕪めを引き

贄の少女を据置きたり

たぐいたはしや稲田姫

きのふまでおけしほも

数多の人にかづつかれ

あらし風にも當ぬ身を

つれなく一人捨られて

父よと呼べば谷のこゑ

母よと呼べば松のかせ

斯るべしとは夢にだに

いざいざあやの振袖も

しほりかねたる哀さよ

をりし山鳴り震動

谷の水たと立ちよめ

腥風サツト吹きたこり

俄かに降り来る雨の足

鳴神いなづま閃きて

大蛇の姿あらはれ出で

あたりを照らす眼の光

紅花の舌を吐きつゝも

立寄る一ツの甕のかけ

贄の少女はありあけの

月夜にあらぬ花かつら

姿は一ツかけは二ツ

三ツ四ツ五ツ六ツ七ツ

八岐のたろちが精神は

毒酒のかほりに奪はれて

ハツの甕にハツの頭

いで飲みほして酒底の

少女を贄にとりんとて

ためてを浸し頭を下げ

飲めどめく盡きせぬ泉

漸次に傾く大蛇のかけ

面色變じてあかねす

つのは珊瑚の枝と化

忿怒の醉にあーびきの

山もゆるぎてゆうく

カツバと伏し起上り

真の少女はあれこそと

執念を顔色つくいは

巖をうがち木をたき

うろこを鳴し角を振り

高棚めがけかりは

凄どかりける勢ひなり

姫は泰然と身をかま

寄らば突かむと懐剣を

握り固めつ居給ひも

いかで毒蛇に敵ふべき

のがれがたなき刹那

斯く有るべしと豫てより

木蔭にひそみ待給ひ

素盞鳴の尊走せきたり

やんはに大蛇を抱止め

勇力こめて引きつれば

たろちは怒の鱗を立て

猛火の脬は利劍を吐き

邪魔なす尊をひと奪と

ふり向く頭を寶劍にて

唯ひとつきに突き通し

ひるむ所をドウと投げ

頭にニツカと踏またがり

大蛇がそびらを切裂き

尾筒に藏せし十握の劍

取出し給ひニツコと笑み

むらぐ丸の御劍と名け

その後天照大みかみに

捧上げ給ひけるとなむ

さて丸尊は稲田ひめの

危急を救ひ給ひければ

長者の悦喜斜めならず

姫をば妃にたてまつり

厚き御恩を謝しまつれり

此時御製に



ハ雲立つ出雲ハ重垣妻ごめに

ハ重垣つくるそのハ重がきを

是ぞ三千一文字の始にて

大婚いはふひとびとは

野に満ち山に一々島の

歌にやばらぐ君が代は

ハ一まの外の國までも

恐ま一る一と御ギナレ

恐ま一る一と御ギナレ

明治四十三年六月十日印刷  
全 四十二年六月二十五日發行

發行兼  
編輯人

大阪市東區和泉町二丁目一番地  
有 村 彌 四 郎

印刷人

大阪市東區和泉町二丁目一番地  
藤 井 護 三 郎  
電話東四五五九番

印刷兼  
發行所

大阪市東區和泉町二丁目一番地  
藤 井 改 進 堂  
長電話東二七〇番

265  
109

